

進士五十八著 『日比谷公園—100年の矜持に学ぶ』

Pride in HIBIYA Park

SHINJI, Isoya

鹿島出版会 2011年

Kajima Institute Publishing 2011

進士五十八 SHINJI Isoya⁽¹⁾

1. はじめに

私の専門は、造園学でありこれまで造園家として環境計画の仕事もやってきた。日本の造園教育は伝統的に農学系大学でおこなわれてきたが、ハーバード大学などはデザイン学部、最近日本でも造形芸術大学系でランドスケープデザイン学科として教育するものも増えている。いわゆる学際性に富む分野とも言えるが、それゆえ社会的認知が高まらないディレンマもある。

朝日新聞社のAERA Mookで私は『農学がわかる』と『観光学がわかる』、それに何故か『恋愛学がわかる』(1999)に、それぞれ「造園学」項目で執筆を依頼されている。各方面に関わる「造園学」の学際性の故だろう。

そして『恋愛学がわかる』で声が掛かった理由は本稿テーマ「日比谷公園の総合的研究」シリーズのおかげである。タイトルは「造園学—データは公園に限る」(pp. 55-53)であった。こういう話を学術会議の席で話すと大抵おもしろそうですね、といわれながら、何となく軽蔑される。サイエンスでないと思うらしい。造園は人間の望ましい環境を計画するための技術であり芸術だ。だから雑学が有効で、生活学とも共通する点だ。私は呉羽化学工業東京研究所の実験屋を経て、非人間的で環境破壊に手をかす化学から造園に転身した。そして今私は造園学人生がおくれたことを心底喜び、造園との出会いに感謝している。

この度、日本生活学会今和次郎賞を受賞できたのも、曖昧で科学かどうかもわからず、学術・芸術・技術でもあると定義する「造園」の道へ進んだからこそ、「生活学」に心魅かれ「考現学」の方法の有効性、「生活史」の視点の意義を自覚できたのだと思う。

私にとっては大学人人生の大半で、つきつ離れつ「日比谷公園」と併走してきた。研究法でいえば、「造園学」の理念と方法、「生活学」の理念と方法が、フィールドとしての「日比谷公園」で融合したといってもよい。その意味で、2つの学会と会員の皆さんとの出会い同様、日比谷公園との結縁をつくってくださった恩師江山正美、上原敬二、井下清の3先生の学恩にも深く感謝している。

この度の今賞の額装やメダルはもちろんだが、賞状の文章が私にとっては特別にうれしいものだった。

「賞状 進士五十八殿 あなたは卒業論文以来わが国の都市洋風公園の嚆矢である日比谷公園の創設から現代までの歴史そして未来を含めた公園の価値と役割を研究し『日比谷公園—100年の矜持に学ぶ』にまとめられ、生活学の発展に寄与されました。日本生活学会はその業績をたたえ2011年度今和次郎賞を授与いたします。2012年6月2日 日本生活学会会長後藤春彦」

45年ちかい日比谷公園との長いつきあい、過去、現在、未来、公園の価値と役割、生活学への寄与……そのどれも私が大切に考えてきたことだ。だから素直にうれしい。幾つになっても誉めてもらったり、認めてもらうのはうれしいものである。そして冒頭、あなたは卒業論文以来、その通りだが、オールドアカデミズムでは書けない、当に生活学会ならでは人間的で率直な表現がほんとうにうれしい。

学会員各位に感謝をこめて、以下に一文を誌したい。

本文では私の根っ子にある「造園」を若干説明、その上で「日比谷公園の生活史と考現学」、さらにはこれまで多

(1) 東京農業大学 名誉教授 Tokyo University of Agriculture, Professor Emeritus

少とも生活学会や生活史観的視点で取り組んだ論考のリストを整理してみた。かなり多彩な分野や対象を扱ってきた。そこでの生活学の有効性のようなことを考えてみたい。参考になるかどうかはわからないが、どんな研究テーマであっても、「生活学」を援用することが可能であり、私の試行錯誤がどのようなものであったかを知ってほしいからである。

2. 私の根っ子の「造園」、造園学から生活学へ

ふつう、庭園や公園は誰にでもわかる。そうした園（その）や風景を創る技術学として「造園」はあるのだが、多くの方々は、「造園」というとその本質は勿論のこと、その活動範囲すらわかってくれない。

庭園、公園、街路樹、都市緑化、墓園、市民農園、農村計画、地域計画、国立公園、観光地、リゾート、自然環境保全、自然保護などと言えばわかってもらえようか。日本における「造園」は、英語の Landscape Architecture の訳語として造語された。Architecture が当時は、造家（学）であったので対照的につけられたのだろう。造園に定着されるまでに景園学の用例も一部にあった。現在、韓国では学会も韓国造景学会と称している。なお中国は、中国風景園林学会。日本造園学会は、関東大震災からの復興には Architects のみならず Landscape Architects も必要不可欠と考えた当時アメリカから帰国間もない林学博士上原敬二が井下清東京市公園課長、文学士龍居松之助の両氏の助力で創設した私立東京高等造園学校（渋谷区渋谷4丁目4 東京農業大学常盤松キャンパスの校舎一部を借用して大正13（1924）年に開校したわが国初造園技術者養成の専門教育機関。現東京農業大学地域環境科学部造園科学科）の経営主体として大正14（1925）年4月に設立されたが、法規的課題があつて以後別々に運営され、昭和8（1933）年本多静六会長で新発足した。大正14（1924）年11月「造園学雑誌」創刊号発行。昭和9（1934）年2月、「造園雑誌」に改題、平成6（1994）年8月、「ランドスケープ研究」に改題、現在、本誌のほか「発表論文集」「作品選集」「技術報告集」を出している。それぞれ学術、芸術、技術の成果を発表しやすい形にしようというものである。

造園学の体系は、歴史原論、計画設計学、材料施工学、管理運営学だが、大学のカリキュラムでは、西洋庭園史、東洋庭園史、日本庭園史、近代公園史、造園原論、造園計画原論などに実用本位で細分化し、又計画設計学がその基礎となる景観政策論、法規、植物学、生態学、環境心理などと、庭園デザイン、公園デザイン、ランドスケープデザイン、観光地計画、風景地計画など応用に細分化している。

私の研究は、学内事情と私自身の総合志向もあつて、庭園、公園、都市、田園、自然の全フィールドを舞台として、環境、景観、造園をキーワードに取り組んできた。本稿を書くために改めてチェックしてみたところ、研究論文のみならず、単行本、報告書、準学会誌、行政刊行物、放送の主たるものなど大学の自己点検の記録に記載されているようなすべてをカウントすると約1500本ほどある。約45年の大学人生活とすると、30~40本/年、3本/月、実際の著述はその倍ちかい量ではなかったかと思う。

私の研究の視点はやはり歴史原論系であり、学会賞や日本農学賞、読売農学賞、紫綬褒章などの受賞対象も「日本庭園の特質」などこの分野が中心で学術論文数もここが最大である。

しかし、私の仕事の総量でいうとその応用である庭公園計画、緑の基本計画、景観基本計画など行政の要請で取り組んできた実際の課題解決のためのテーマが圧倒的で、後半は研究所長、学部長、学長など大学運営活動が主となり、また関係10学会長など引き受けてきたので、併せていまいふうに言えば社会貢献が殆どであった。ただ私は、この部分は応用造園計画学だと考えることにしてきた。事実、そこに歴史で学び原論で考えた数々のアイデアを提案し、かなりのプログラムを実現してきた。これは振り返るとなかなか達成感があり生きることの妙味のひとつであったと思う。

そしてこの応用実務編の思考回路を培養してくれたのが「生活史」「生活学」の視点であった。狭い庭園研究の、しかも論文だけの仕事だけであつたら、つまらない人生になっていただろう。様々な学協会、行政の委員会、審議会、市民NPOなどとの、たくさんの異業種交流生活が、どれだけ広い目、正に“ランドスケープの目”と、原論から問題解決のための柔軟な対応までの“ふところの深さ”を、単純で気の短かい私をどれだけ大きく育ててくれた

かと思う。つまり、私に豊かな人生を与えてくれたのは、時間軸で長い目で見ると「生活史」、社会的空間的に広い視野で語れる「生活学」の視点であった。

私は生活学会理事会の席上、「生活学会は多くの会員にとって、サブの学会だから、主体的な学会の担い手が少ないのでは？」と発言して、足立巳幸元学会会長にお叱りをいただいたことがある。当時の私は、メインの学会は造園学会で、研究業績として評価されるべきはメインの学会でないといけぬ。幅を広げるのがサブの学会、というほどの軽い考えでいたのだろう。

ところが、そうではない。何事も生活学の視点、或いは生活学に向けて収斂するような学への追求こそ本物だ！と足立先生はおっしゃった。のだろうと、私は理解し、そうだ、その通り。それが本当かもしれない。そう思うようになった。

考えてみれば、私たち専門家は、自分の専門の立場で、専門分野に至上の意義や価値、ミッションを持って生きている。そうでないと成果が上がらないともいえるが、その結果自らの専門によって何に奉仕すべきかを忘れてしまう。いかなる専門であっても、結局は人間の幸せ、人々の福祉生活に寄与するために存在するものであるべきだ、ということをおぼえてしまうのである。

私は、この結論に至るまでの足立先生のおっしゃるような深い思いもないままに、折にふれて「生活史」の視点で事実を読むことを方法論として確立したいとは願ってきたし、できればみどりや環境を基調とした暮らし方、生き方の「生活学」を定着させたいとは思いつつも、正直言って、どちらかといえば、サブテーマとして色々かいてきた。

今和次郎賞をいただいたのを機に、改めてそのことを自覚した。この際、生活史視点で、また生活学提案で書いたものを整理してみよう。そう思い立ち後段に受賞業績ではないものも含め年代順に列記してみた。生活学会では学術論文を出そうと思っていなかった分、そのときどきの私自身の関心事や問題意識が素直にでていて懐かしい。

ただ著作リストを改めてみて、この度の受賞対象「日比谷公園」を“生活史”の視点で捉えようという意識は、1982年生活学会報9(4)²⁾に、既に30年も前からもっていたことがわかり、前述の「卒業論文以来」の感慨再びである。

3. 日比谷公園の生活史と考現学

私は造園デザイナーになって自分の好きな庭園を創作してみたいと、東京農大造園学科に入学した。1年生のとき仲間と京都に合宿し、京の庭を片端から見て歩いた。何故、西洋庭園のような噴水や彫刻ではなくて自然石や自然風の滝や流れの造景になったのだろう。そんなことから、在学中「日本庭園河原者造型論」と「禅の庭否定論」の2論文の構想ができ、卒論計画の提出にあたって指導教授の恩師江山正美先生に相談した。お会いしたら即、「キミには、日比谷公園の改造設計をやってもらいたい」と、ほとんど命令であった。何で私が日比谷公園の卒業制作なのか？疑問を口にもできず「日比谷公園をやりますが、日本庭園もやっていいですか？」それだけ言うのがやっとであった。

後でわかったことだが、(財)東京都公園協会には各大学学部の卒業論文に「東京都公園協会奨励賞(井下賞)」を授与していて、当時東大、千葉大、明治大、日大そして農大の造園教室が競っていた。江山先生はいかにも長州人らしく負けん気が強く、先生の母校東大に勝つんだと何事につけ競争。何がなんでも農大の卒論を受賞させたいと考えていた。それには、当時の東京都公園緑地部が課題としていた日比谷公園改造問題への提案が一番。そうして前年にも図面の上手い先輩に提案させたのだそうだ。しかし、現実離れした理想案でダメになり、それで私に再チャレンジさせよう、ということだったようである。

この頃の大学教授は偉くて、殊に江山先生は特別で学生は恐がっていた。こうして私は、実現性のある日比谷公園改造計画案をめざして作業を開始。歴史を調べて日比谷公園の核心は何か！次に利用者の観察から、何処が喜ばれ、どこが困ったことなのか調べよう。当時の江山教授のやり方は、テーマを与えるだけで、研究目的の解説も研究方法のアドバイスも何もしない。「研究とは、個人のものである！、自分で考えよ！」この一点張り。授業にはな

かったが、私はたまたま3年生のとき『近代造園の発展』という大学祭(収穫祭)展示をまとめたりにしていたので、日比谷公園の歴史的意味は理解していたので、自己流だがこれを深く掘り下げようと考えたのだ。もうひとつ、利用者調査。これは、いまならマン・ウォッチング、生活学会でなら考現学の方法。ただ当時は、今和次郎も考現学もまったく無縁で何も知らない。公園事務所で、管理用の白焼き1/1000図面をもらって、週1、2回のペースで公園に通い“観察”を続けた。

いま思えば、今先生の井の頭公園ピクニック、自殺分布などと、私も同じ気分を追体験していたのかも知れない。

日比谷公園が単なる緑のオープンスペースでないこと。小音楽堂のコンサートにはリピーターも多く、公会堂のイベントも同様。松本楼の食事や噴水広場でのOLたちの弁当、朝夕のジョギングなど本当に多様な公園生活の楽しみがあること等。ほぼ丸1年半の日比谷公園通いは、たくさんのことを学ばせてくれた。

大学の演習で、都市公園法、公園の機能、公園施設とは?と教わったからといって、「公園設計図」が描けるような、単純なものではないということ。大都市東京の壮大な歴史の影響をまともに受けて、というか、日比谷公園そのものがその歴史そのものを生み出してさえきたこと。そして、そうしたことのすべてが積層して今日の日比谷があり、この公園の魅力の根源もそこにあるのではないか、というようなことを考えるようになる。私の公園利用者の観察やヒヤリングからは、高い満足度が感じられ、「何故、改造しなければならないのか?」と思うようになっていく。

日比谷公園は当時公会堂、野外音楽堂があつて、学生運動や政治集会の場ともなっており、ニューヨーク セントラルパークのバンダリズム(破壊主義)ほどではないが、現在からくれば、やや荒れた感じがあつたのも事実。また一説には、旧帝大における“農・林の対立”が糸を引いていたとも言われる。日比谷公園の設計案は、東京駅の設計者造家学者辰野金吾工学博士案など何案も提出されたが、最終実施案は帝大農科大学林学科教授本多静六林学博士によるもの。そういうこともあつて、日本の大学における「造園学」の開講は帝大林学科の本多教授が初。しかし同時期、帝大農科大学農学科園芸講座の原熙農学博士も「造園学」を開講、先陣争い、さらにその卒業生が内務省の国立公園部門と都市計画都市公園部門に2分して就職して、農・林の競争関係になってゆく。

都市公園行政をリードする農学系造園家は、日本初の洋風都市公園が林学系の本多案では我慢できない。早く改造したい、というわけだ。真偽はともかく、そういう気分があつたのは事実である。誰も日比谷公園のほんとうのすばらしさを言わない中、改造すべしという議論は再三あつたようである。

ともあれ、私の卒論は「日比谷公園の研究」歴史編(厚さ5cm)、現況編(2cm)の2冊、「日本庭園河原者造型論」(1.5cm)、「公園設計に関する基礎的研究、特に公園利用者の占有位置と占有特性」(1.5cm)、の計4冊になった。

結局、日比谷公園の改造設計は無し。江山先生は、一番努力しがんばつた歴史編は史資料の収集でしかないと全否定、ただ“占有空間特性の調査”はオリジナリティがあつて面白いと評価して推薦、学長賞と井下賞をもらうことになった。

当時の造園学科には大学院もなく、研究室もなく、研究のための方法論も、論文の評価基準も独創性の意義も教わらなかつた。助手として大学に残って直ちに、造園学の文献目録、造園用語辞典の編集をし、後掲するリストの4)~11)の日比谷公の総合的研究を組織的に立ち上げたのは、環境心理学や行動科学の方法論を参考に公園調査法を確立したかつたからである。また農大の学長になったとき世界初の造園学専攻の博士課程を設けたのも、研究指導体制の重要性を痛感していたからである。

ところで卒論の占有空間特性調査は、園地利用者の自由度の高い明治神宮内苑の宝物殿前の大芝草地をフィールドとし、その利用者の坐っている位置を2組の平板測量でプロットした。利用者に気づかれないよう遠くから1組の利用者を平板上でクロスして正確に位置を出す。こうして利用者の占有位置の過半は“林縁部、forest edge”で、利用者は背林、前開の位置を好むこと。その利用者たち“カップル間の距離は平均40フィート(12m)”で、相手の顔の表情がわかるかわからないかの限界距離であることが私のオリジナル調査結果であつた。今先生の井の頭公園ピクニック分布図を後年『今和次郎集』を手に入れて“何だ私と同じことに今先生も関心をもっておられたんだ”とうれしくなつたものである。ほんとうは、今先生がやられたことを私もやっていたということだが。

もうひとつが日比谷公園生活史である。詳しくは受賞図書に譲るが、その要点は以下のとおりである。

日比谷公園生活史——洋風幕の内弁当、誰でも受け入れる、都心立地の波乱万丈伝

明治期（憧れの西洋）

- ・ 22年（1889） 東京市区改正設計議定／日比谷公園 54,000 坪
- ・ 26年～33年 各会からの複数計画案提出
- ・ 34年 本多静六林博士設計で決定 予算 383,000 円/3ケ年
- ・ 35年9月 本格着工、175,000 円支出
- ・ 36年（1903） 6月1日仮開園式——3つの洋／洋花、洋楽、洋食で市民に人気
- ・ 37年（1904） ロシアに宣戦布告、仁川海戦祝捷会など、以後国家広場的性格を見せる

大正期（国家広場・震災対応）

- ・ 11年（1922） 大隈重信国民葬（1月）、山県有朋国葬（3月）
- ・ 12年（1923） 9月1日関東大震災、公園課が集団バラック 144 棟を建設、6130 人を収容
- ・ 13年（1924） 末田ます女史の児童遊園（nature study をコンセプトとする公園での児童指導開始）

昭和期（戦災復旧・GHQ 接收・周辺都市開発）

- ・ 元年（1926） 2月11日建国祭
- ・ 2年（1927） 御大礼奉祝大演奏会
- ・ 13年（1938） ムッソリーニ伊首相からローマの牝狼像
- ・ 16年（1941） 金属回収で外柵撤収（このころ草地にイモ畑、第1花壇に高射砲陣地）
- ・ 20年（1945） 敗戦、松本楼、園地など GHQ 接收
- ・ 29年（1954） 第1回全日本自動車ショーの会場
- ・ 33年（1958） 野外彫刻展（38年からは白色セメントで）、地下鉄丸の内線
- ・ 34年（1959） 浅沼稻次郎刺殺（日比谷公会堂）
- ・ 37年（1962） 道路拡張で霞門側、42年（1967）桜門側の敷地が減少
- ・ 48年（1973） 松本楼再建、10円カレーのチャリティ開始
- ・ 59年（1984） 第2回全国都市緑化フェア会場
- ・ 61年（1986） 旧貴族院議長官舎跡に、かもめの広場（郷土樹木園）完成

平成期（日常利用的性格の公園、パークマネジメントの時代へ）

- ・ 2年（1990） 日比谷グリーンサロン完成（12年からは緑と水の市民カレッジ）
- ・ 15年（2003） 日比谷公園 100 周年記念、以後ガーデニングショウなど定期開催（この頃から民活路線、パークマネジメント時代へ）
- ・ 17年（2005） オクトーバフェスト（ビールのテント）に貸与
- ・ 20年（2008） 年越し派遣村
- ・ 24年（2012） 第29回全国都市緑化フェア会場

私の理解では、「生活史（life history）」は昆虫など生き物の発生（誕生）から生長し成体、そして死ぬまでの過程をさして使われてきたいわば生物学用語である。当然、生物である人間にも当てはまるが、これを私は庭公園など造園にも当てはめて考えたいと思ったのである。設計施工された建築など落成式のとき一応完成形をみせ、後は劣化するばかりで、これを営繕するのが普通だが、時間と共に生長する樹林、四季折々変化する動植物を基調とする「造園」の場合は、風雨によってウェザード Weatherd の美を加え、何十年何百年の時間的経過によってエイジング Aging の美（日本庭園では「然び（さび）の美」という）を加える。本質的に「造園」は、空間以上に「時間——生長する世界」といってよい。だから、維持管理というより保育管理、運営管理——近年これを“パークマネジメント”と呼んでいる——が重要で、そのためにも「生活史」の視点で庭公園は研究されるべきだ、というのが私の考えである。

これまでの庭公園史は、作庭家や設計者、作庭や事業決定への経緯、完成、供用までで完了していたが、私の生活史研究という新提案は“庭も公園も生きている”という認識、“時代の変化を受けて変容し成長もしくは破壊され変貌していくのが造園”だという基本認識によるものだ。更に言えば、“美しく構成された芸術的空間——デザイン作品”という一面からだけではなく、自然、立地・社会背景、財政事情、オーナーの思想と世相、時代の自然観や風景観、政治経済、文化教育、社会福祉、環境問題などいわゆる多面的な社会条件に規定されながら構成され、工事完成後もそうした諸条件と関連しながら変遷を重ねるのが「造園」だという認識で、モノとコトを考えなければならぬので、そうした観点を「生活史」に込めたかったということである。

本書は全12章で構成している。1章「西洋の受容」、2章で「本多静六の設計術」では林学博士本多静六案で難産の末具体化、成立するまでを詳述したが、特に日本人の感性が純正西洋式デザインを拒絶したこと——西洋の受容への日本人の態度——に私の見解を述べ、それが本多案採択の一因ではないかと考察した。3章「三つの洋と憧憬の世界」では文明開化時代の西洋風公園への人々の期待を“3つの洋——洋楽・洋花・洋食”で象徴化してみせたが、この言い方は松本楼の小坂社長はじめ最近では都の公園協会などみんなが日比谷公園の紹介につかうフレーズとなっている。公園・パークの言葉の響きが近代日本では“おしゃれな、憧れイメージ用語”になったのは日比谷効果であったろう。4章「生き物文化公園」、7章「末田ますのネーチュアスタディ」、8章「イベント・オリエンテッド」の3つの章は日比谷公園としての特色というか先見性を論じたものだが、多くのことは意外に世に知られていないので新発見を楽しんでもらえそうである。

5、6章「波乱万丈伝Ⅰ、Ⅱ」では明治元勳たちの国葬など国家広場の側面、数々の政治集会事件の舞台としての、また、震災時、戦時下の避難場所仮説、食料生産、死体の仮埋葬地としての日比谷公園を紹介した。美しく管理された花壇や噴水を眺めているだけの市民の目には映っていない、正に「公園生活史」の負のハイライトである。詳細な100年史の年表も本書に整理したが、著作リストの2)～4)、36) 41) 74) 86) 111) 128) に相当する。

9章「空間と利用の多様性」は、著作リストの4)～11) 14) 18) 19) 36) 41) のデータを解説したもので、“日比谷公園利用者考現学”の実際”といったものである。ただ研究者には、リストの論文を読んでほしい。

最後の3つの章は社会と公園関係者に対する私からのメッセージである。10章「歴史的公園をめざせ」は、100年も市民と共に歩んだ空間は、もうそれだけで十分な文化的価値を獲得しており、その歴史のオーセンティシティ（真実性）を基本に置きながら、これからの公園人生を全うさせるべきこと。11章「井下清と公園経営」、12章「パークマネジメントのこれから」は、私の最も尊敬する大先輩、東京市の公園行政を永年にわたってリードされた井下先生の“公園思想と多磨霊園や震災復興52小公園事業などの実際”を少しでも多くの読者に知ってもらうこと、その根本思想は普遍性に充ちたもので、“市民のための公園・Parks for People”であったこと。その精神を踏まえて、激化する都市間競争時代の日比谷公園を如何にパークマネジメントすべきか、現実への取り組みを考えた。それにしても、私の公園論、造園学は、こうした先人に学び、利用者調査に学び、自ら公園利用者として何百回となく訪ねた公園自体から多くを学びながら培われたものであったと改めて納得する。公園の生活史に私自身の生活史も多大の影響を受けている。何事につけ歴史軸で物を考え、わが目わが身体で現実をウオッチングすることの大切さを、私は日比谷公園から学んできたように思う。

2003年6月、東京都は日比谷公園100年記念事業としてたくさんのイベントやプログラムを、財政難の折から民間活力の導入によって実行した。そのひとつに「思い出ベンチ」がある。不確かだが、都民が10万円寄付したら1基ベンチを公園内に設置する。寄付者からのメッセージは金属プレートに印字され、ベンチの背に張られる。いま日比谷公園にはこの思い出ベンチが何百基も配置され市民憩いの席となっている。

思い出ベンチのメッセージを読むと、そこに市民にとっての“公園の意味”がよくあらわれている。公園への思い出のみならず、私的な思いや詩情、社会への主張など色々だ。いくつかを紹介する。

「日比谷公園幼稚園を1935年に卒園致しました。ここが私の出発点です。平田麗子（旧姓竹内） 2003.7。」

日比谷公園の一角、末田ます女史の児童遊園のことだろう。松本楼の小坂社長も同じ卒園生だ。

「小学一年生の遠足が日比谷公園でした。あれから七十数年、何十回来たことでしょう。北川操 2003.7」

- 「平成拾参年壹月拾九日金婚式を迎えた両親、志正&みゆき ほんま ありがとう 産んで 育ててくれて 両親の愛に見守られて、障害のある娘 井手純子 2003.3.7」
 「春寒く 咳入る人を 気遣いて 正雄 2004.6」
 「やさしかった青ちゃん 見守っていてね。毎年ベンチに坐りに来るからね ありがとう ピーちゃん (芳江) 2005.11」

ひとの生死、出会いと別れ、記憶、思い出。公園は一人ひとりの市民の生活史の舞台となっていることが、よくわかる。激変する大都市の都心地区に不変の座標軸の原点として公園が存在してくれなければ、こうした市民は抛り所を失うことになる。

私は、思い出ベンチのメッセージを1枚1枚読ませてもらいながら、2つのことを思った。ひとつ、日比谷公園中の思い出メッセージを全部記録して、性別、年代等属性、思い出のタイポロジー、メッセージの分類・公園の何処、何に印象が残っていたか?……そうすれば公園という場がどのように市民生活を支えているか「公園価値論」を示せるはずだ。まだ、研究者の性がきえていないらしい。

もうひとつは、公園の社会的意義——人々の思い出装置だということ、そして思い出が沢山つまっている公園こそ立派な公園だという物の見方の大切さについて。一方、市民ひとりひとりの生活史が、公園生活史を魅力的にするということも大切。デザイン系のプロは、どうしても造形意匠に目がいき易いことを、いつも留意していなければいけないのだろう。それを知らしめるこそ生活学会の大きな存在意義だろう。

4. 進士五十八・生活史／生活学関係著作リスト (*共著者、ページなど省略)

- 1) 公園生活史の研究1. 横浜公園にみる生活史的考察、生活学会報9(1)1982
- 2) 公園生活史の研究2. 日比谷公園にみる生活史的考察、生活学会報9(4)1982
- 3) 公園生活史の研究3. 比較公園にみる生活史的考察、生活学会報10(3)1983
- 4) 日比谷公園の総合的研究(1)、歴史的積層空間としての日比谷公園の性格と生活史的考察、昭和58年度日本建築学会関東支部研究報告集54 1983
- 5) 日比谷公園の総合的研究(2)、公園利用者態の24時間調査による空間生態学的考察、昭和58年度日本建築学会関東支部研究報告集54 1983
- 6) 日比谷公園の総合的研究(3)、利用者態の類型的把握による園内単位空間特性の考察、昭和58年度日本建築学会関東支部研究報告集54 1983
- 7) 日比谷公園の総合的研究(4)、利用者の意識レベルからみた日比谷公園の利用特性と園内単位空間の評価に関する考察、昭和58年度日本建築学会関東支部報告集54 1983
- 8) 日比谷公園の総合的研究(5)、都市および東京の中で“日比谷公園”に対する社会的認識の考察、昭和58年度日本建築学会関東支部研究報告集54 1983
- 9) 日比谷公園の総合的研究(6)、園内単位空間のイメージ因子と空間構成の対応関係の心理的空間評価法、昭和58年度日本建築学会関東支部研究報告集54 1983
- 10) 日比谷公園の総合的研究(7)、ベンチの占有頻度とベンチ空間の心理的評価ならびに空間の物理的条件の関係についての考察、昭和58年度日本建築学会関東支部研究報告集54 1983
- 11) 日比谷公園の総合的研究(8)、日比谷公園に関する総合的研究の意義と各調査研究方法の有効性並びに問題点の考察、昭和58年度日本建築学会関東支部研究報告集54 1983
- 12) 緑地生活への計画論的考察、日本造園学会関東支部大会 1983
- 13) 都市社会と「農」、埼玉県企画財政部、見沼田圃論集 1983
- 14) 公園生活史の研究4. 浮浪者と都市公園の現状と意味、生活学会報11(1)1984
- 15) 庭の生活史研究、或る人(stattさん)の緑とスペースとのつきあい方、生活学会報12(2)1985

- 16) 都市美ガイドライン調査、東京都生活文化局 1986
- 17) 品川御殿山の生活史的研究、日本造園学会造園雑誌 50 (5) 1987
- 18) 住所なき人々の生活学、大都市最後の自由空間・公園、日本生活学会春秋生活学 (1) 1987
- 19) 明治期、東京の公園地における飲食施設の史的考察、造園雑誌 51 (5) 1988
- 20) 高齢化社会における豊かな都市空間の創造・エイジング都市、東京都行政管理 39 (2) 1988
- 21) 人々が求める緑の変遷・緑の社会史、日本緑化センター、グリーン・エージ (178) 1988
- 22) 考現学は今 (新宿御苑芝生広場でのカップル分布調査などパネル)、日本生活学会記念展冊子 1988
- 23) 震災復興公園の生活史的研究、造園雑誌 52 (3) 1989
- 24) 環境にやさしい暮らしの工夫、環境庁編 (単行本・分担執筆) 1989
- 25) 住みやすい町の条件・下町と山の手 (単行本・分担)、晶文社 1990
- 26) 浜離宮庭園の生活史的研究、東京農業大学農学集報 35 (1) 1990
- 27) 庭の人間学①~②、(華道小原流機関誌)、小原流挿花 (470) ~ (481) 1990
- 28) 庭と自然と人間と、(NHK 教育テレビ 4 回放送)、さわやかくらぶ 10 月号テキスト 1 (7)、日本放送出版協会 1990
- 29) 江戸期浜離宮庭園における回遊利用の図上復元についての研究、造園雑誌 54 (5) 1991
- 30) 日本庭園の空間、自然と人間、景観と時間の合一化、ペリかん社、日本の美学 (16) 1991
- 31) 文化としての緑、江戸東京の盛衰、都市出版、東京人 3月号 (42) 1991
- 32) 緑が多いだけじゃない! 大江戸の多趣味空間、農文協、現代農業臨時増刊 1991
- 33) アメニティ・デザイン、ほんとうの環境づくり (単行本)、学芸出版社 1992
- 34) アメニティ環境への理念と方法、東京市政調査会、都市問題研究 45 (6) 1992
- 35) 江戸と東京の自然環境、〈緑〉市民生活と緑文化、新人物往来社、歴史読本 8月号 37 (15) 1992
- 36) 日比谷公園再生基本計画調査、東京都建設局 (単行報告書) 1992
- 37) 横浜における都市変容と公園の変化に関する考察、日本造園学会関東支部報告 1993
- 38) 路地の緑と暮らしに関する調査研究 (谷根千地域の路地の緑の実態)、日本造園学会関東支部報告 1994
- 39) エコライフの構築、家庭科学 60 (4) 1994
- 40) エコロジカルライフスタイルの政策科学的研究、横浜市環境科学研究所 1994
- 41) 日比谷公園学講座、東京都公園協会 (単行報告書) 1994
- 42) Farmland Reservation and Rural Landscape Management as Regional Landscape Resource in Urban Area, 日韓中都市計画学会国際シンポジウム論文集 1995
- 43) A Healthy Way of Life, 朝日新聞社 1995
- 44) 都市になぜ農地が必要か、実教出版 (ブックレット) 1996
- 45) タウン誌分析による地域資産の関心度に関する調査研究、日本造園学会関東支部報告 1996
- 46) 市民参加時代の公園管理運営への対応、公園緑地管理財団、公園の管理 (12) 1996
- 47) 韓国ソセオンからの発見、田園共生/自然依拠型環境デザイン、マルモ出版、ランドスケープ デザイン (10) 1997
- 48) 中国杭州「西湖十景」の変遷からみた風景地の成立過程、日本造園学会ランドスケープ研究 61 (5) 1998
- 49) 目黒区旧西郷従道邸庭園に関する造園生活史的研究、ランドスケープ研究 61 (5) 1998
- 50) 「農」の多面的意義と都市の農村化への展開、日本都市計画学会、都市計画 47 (5) 1998
- 51) 乳幼児連れの母親の公園利用実態からみた公園デビューに関する一考察、ランドスケープ研究 61 (5) 1998
- 52) 人間と自然の相互理解法、アベック調査のすすめ、裳華堂、遺伝 52 (2) 1998
- 53) 多様なライフスタイルのあり方に関する試論、過疎地域における多自然居住地域としての整備支援事業 (報告書)、国土庁地方振興局 1998

- 54) Landscape Tourism of West Lake in Hangzhou, China as a Heritage Place, 35th IFLA (International Federation of Landscape Architects) WORLD CONGRESS 1988
- 55) 風景デザイン、感性とボランティアのまちづくり (単行本)、学芸出版社 1999
- 56) 都市居住環境の再生、首都東京のパラダイムシフト、彰国社 1999
- 57) 福祉社会事典、弘文堂 1999
- 58) 生活学事典、TBSブリタニカ 1999
- 59) 造園学、AERA Mook・恋愛学がわかる、朝日新聞社 1999
- 60) 現代の名園、わが家のエコ・ガーデン マイホームプラン 29 (4) 1999
- 61) 百姓の環境デザイン、風土社、季刊ちるちんびと (7) 1999
- 62) 講座生活学 (6)、生活空間論、光生館 2000
- 63) 環境 NPO マネージメント入門、生き物緑地活動をはじめよう、風土社 2000
- 64) 生活風景論、せたがや百景の提唱を通じて、2000 年度日本建築学会大会、都市計画・農村計画部門研究協議会 2000
- 65) 新世紀の田園居住 (学会主催、コンペ審査委員長として)、日本建築学会建築雑誌 115 (1454) 2000
- 66) 都市生活者のファーミング、農林統計調査 2 月号、2000
- 67) 景観からみた東京都建築紛争事例分析、特に建物高と距離、農学集報 45 (1) 2000
- 68) 旧岩崎久彌本邸庭園の造園史的研究、農学集報 45 (1) 2000
- 69) 川崎多摩川エコミュージアム構想をモデルとして市民・企業・行政・専門家におけるパートナーシップ型地域づくりに関する調査研究、とうきゅう環境浄化財団、研究助成学術研究 (28) 2000
- 70) Landscape and Educational Abilities of "Agriculture", FARMING JAPAN 35 (5) 2001
- 71) Development of Open Garden Society in Japan, 38th IFLA WORLD CONGRESS, Singapore 2001
- 72) 川・人・街、川を活かしたまちづくり、リバーフロント整備センター (単行本) 2001
- 73) 子どものための公園づくり ガイドライン (責任編集・単行本)、公園緑地管理財団 2001
- 74) 文化遺産、史跡の保存整備とランドスケープ、庭園と風景のまちづくり、ランドスケープ研究 64 (3) 2001
- 75) 柏崎刈羽地域「(仮) 環境共生公園」(委員長、報告)、日本緑化センター 2001
- 76) 園芸福祉のすすめ (監修)、創森社 2002
- 77) 風景考、市民のための風景読本、マルモ出版 (朝日新聞 1994.4 から 1995.3 までの 1 年間全 50 回連載の「私の風景観論」ほか収録の単行本) 2002
- 78) Creation and evolution of the Openspace in the sub-center high raise zone of Nishi-Shinjuku, 農学集報 46 (4) 2002
- 79) 多摩ニュータウンの開発年代の相異による原地形の保存率・形状の変化に関する分析、ランドスケープ研究 65 (5) 2002
- 80) ガーデンアイランド下蒲刈、構想から実現へ、ランドスケープ デザイン (29) 2002
- 81) 人間・植物関係学の原点、人間植物関係学会雑誌 1 (2) 2002
- 82) 環境市民とまちづくり全 3 巻 (自然共生編、環境共生編、地域共生編)、ぎょうせい 2002 2003
- 83) The 21st Century is the Age of "Agriculture", GCHERA 世界大会 (ウクライナ農科大学での Global Consortium of Higher Education and Research for Agriculture) 基調報告 2003
- 84) 日本新発見・子どもの楽園だった頃、ナショナル ジオグラフィック 7 月号 2003
- 85) かわさき 130 万人の農のあるライフスタイルめざして、かわさき「農」の新生プラン、(農振計画策定委員長としてとりまとめ単行報告)、川崎市経済局 2003
- 86) 日比谷公園の 100 年、東京都公園協会、都市公園 (161) 2003
- 87) 東京らしいみどりをつくる新戦略、東京都都市計画審議会専門委員会 (委員長) 答申 2003

- 88) 持続可能な地域社会のデザイン、生存とアメニティの公共空間 (単行本)、有斐閣 2004
- 89) 探究・鎮守の森、社叢学への招待 (単行本)、平凡社 2004
- 90) 東京都世田谷区における社叢の分布・緑被率・敷地面積の分析、社叢学会、社叢学研究 (2) 2004
- 91) 山形庄内地方の地主による救済事業庭園の成立過程とその社会政策的側面、ランドスケープ研究 68 (5) 2005
- 92) 正岡子規の庭園観と子規庵庭園 (1894-1902) の図上復元、ランドスケープ研究 68 (5) 2005
- 93) 都市と農村の連携、(岩波講座・都市の再生を考える (6) 所収)、岩波書店 2005
- 94) 都市における歴史的緑地の保全と再生に関する調査報告書 (委員長として社叢を歴史的緑地と再定義) 日本公園緑地協会 2005
- 95) 景観三法とわが国の景観まちづくり、建築雑誌 120 (1527) 2005
- 96) だれがつくるの? こどもの環境、あそび場のいまとむかし、子ども環境学会、子ども環境学研究 1 (2) 2005
- 97) 多様性からの緑政学、都市公園 (171) 2005
- 98) 日本の庭園、造景の技とこころ (単行本 中公新書)、中央公論新社 2005
- 99) 三鷹市土地利用総合計画 2010 (都市計画マスタープラン委員長として、「緑と水の公園都市・三鷹」構想とする) 2005
- 100) 現代社会における食・環境・健康 (単行本)、養賢堂 2006
- 101) 私の美し国づくり、地域から (単行本)、日刊建設通信新聞社 2006
- 102) EU の農業・経済政策に学ぶ日本型グリーン・ツーリズムの展開方向、実践総合農学会、食農と環境 (3) 2006
- 103) 全国民第 5 種兼業農家化のススメ、都市と農村の共生・対流、常陽銀行、常陽アーク 38 (439) 2006
- 104) 園芸福祉入門 (日本園芸福祉普及協会理事長として、執筆監修単行本)、創森社 2007
- 105) 生活景の意味と建築高さ公害、日本建築学会研究協議会、生活景のポテンシャル 2007
- 106) ボランティア時代の緑のまちづくり (単行本)、東京農業大学出版会 2008
- 107) 日本型環境教育の知恵 (日本環境教育フォーラム編、単行本)、小学館クリエイティブ 2008
- 108) 世田谷区小学生の作文にみる自然体験と原風景に関する考察、日本生活学会第 35 回研究発表大会梗概集 2008
- 109) 料理研究家辰巳芳子邸における食と庭の関係性、日本生活学会第 35 回研究発表大会梗概集 2008
- 110) 都市と「農」、都市計画 57 (4) 2008
- 111) ランドスケープ遺産の保全、日本学術会議、学術の動向 13 (3) 2008
- 112) 環境学のミッション、ランドスケープの眼、学術の動向 13 (6) 2008
- 113) 都市公園管理史における指定管理者制度導入の意味、農学集報 53 (3) 2008
- 114) 上野公園グランドデザイン検討会報告書 (委員長)、東京都公園緑地部 2008
- 115) 景観まちづくり教育検討懇談会 (座長) Web. 報告、国土交通省 2008
- 116) 公園における歴史性、都市公園 (183) 2008
- 117) 都市農山村融合型の自然環境保全活用システム、日本地域開発研究センター、地域開発 (528) 2008
- 118) 実践ガイド・田園自然再生、よみがえる自然・生命・農・地域 (単行本、執筆、監修)、農山漁村文化協会 2009
- 119) わが国農業農村の再起 (単行本)、農林統計協会 2009
- 120) すまいの庭づくりに関する研究、日本生活学会第 36 回研究発表大会梗概集 2009
- 121) グリーン・エコライフ、「農」とつながる緑地生活 (単行本)、小学館 2010
- 122) 里地里山保全活用行動計画 (座長)、環境省自然環境局 2010

- 123) みどり生活を愉しむまち・浜松をめざして 2010-2020 (浜松市緑の基本計画策定委員長として構想立案)、浜松市 2010
- 124) Diversity and Landscape Theory, Towards Achieving Biodiversity in the Natural Environment, Lifestyle Diversity in the Social Environment and Landscape Diversity in the Cultural Environment, 中国風景園林学会、中国園林 5月号 2010
124)の中国語訳論文: 従多様性展開的風景論、中国園林 7月号 2010
- 125) 生態与経済的共生、中国園林 11月号 2010
- 126) 風景園林可持続發展的挑戰和策略、中国園林 12月号 2010
- 127) 現代の田遊び、「ザ! 鉄腕! DASH! !」から見えてくる教育・農政・日本のココロ、ピオシティ (45) 2010
- 128) 歴史に学ぶ公園管理研究法、井下清の業績を例に、公園緑地管理財団、公園管理研究 (4) 2010
- 129) 生物多様性からの「人のつくった森」、明治神宮国際研究所、神園 (4) 2010
- 130) 垂直花苑城市、実現理想城市森稔先生、思想和方法、上海商業、Business Landscape Design 商業景観 (300) 2010
- 131) Action Plan for the Conservation and Sustainable Use of Socio-ecological Production Landscape (Satochi-satoyama) (座長) 環境省自然環境局 2010
- 132) 世田谷区立学校のエコスクールにおけるエコライフ活動ならびに授業内容、日本生活学会第 37 回研究発表大会梗概集、2010
- 133) 東京 23 区超高層建築数の変化分析と地域特性、日本生活学会第 37 回研究発表大会梗概集 2010
- 134) 日本における樹木葬の現状調査、日本生活学会第 37 回研究発表大会梗概集 2010
- 135) 黒沢明映画作品にみる景観演出に一手法、日本生活学会第 37 回研究発表大会梗概集 2010
- 136) 生活から福祉を考える、楽しく生きるための生活 (W.S)、日本生活学会第 38 回研究発表大会 2011
- 137) 景観政策の目標と課題 (東京都の景観行政略史)、都市公園 (193) 2011
- 138) 東日本大震災の復興への提言、グリーン・エージ (448) 2011
- 139) 庭園の条件、災害を克服して美しい風景世界を創る、富士ゼロックス、グラフィケーション (175) 2011
- 140) 提言・東日本大震災被災地域の復興に向けて、復興の目標と 7 つの原則 (委員長)、日本学術会議 2011
- 141) 報告・我が国の都市・建築の景観・文化力の向上をめざして (副委員長)、日本学術会議 2011
- 142) 日比谷公園 100 年の矜持に学ぶ (単行本)、鹿島出版会 2011
- 143) ランドスケープ ダイバーシティ、造園原論の軌跡 (進士五十八研究室の 40 年間の記録) 2011
- 144) 旧台湾総督官邸庭園 (現、総統府台北賓館庭園) における空間とイベントの生活史、日本生活学会、生活学論叢 19 2011
- 145) 哲学堂公園保存管理計画 (委員長)、東京都中野区 2012
- 146) 震災復興に関する提言、自治体学会、自治体学 25 (1) 2012
- 147) いきものにぎわいづくり、社会資本における生物多様性の促進 (座長)、国土交通省 (森里川海生業研究所) 2012
- 148) 福島原発は廃炉にし、周辺地を国有林化、50 年後に伐採、バイオマスに再利用、日刊建設通信新聞、復興への道標 12 カ月 (単行本) 2012. 5
- 149) 美し国への景観読本、みんなちがってみんないい (NPO 法人美し国づくり協会理事長・単行本)、日刊建設通信新聞社 2012. 6
- 150) 2030 年の東京、超高齢社会の暮らしと街づくり (単行報告書)、森記念財団都市整備研究所 2012. 7
- 151) 現代社会における戦後ランドスケープ活動の成果と意義、ランドスケープ研究 76 (2) 2012. 7
- 152) 美しい東京、それぞれの風景ものがたり (単行本)、美しい東京をつくる都民の会編、会長)、東京農大出版会 2012. 8

- 153) 大津波は構造物では防げない！ランドスケープ・アーキテクトと公園オープンスペースの有効性、日本公園緑地協会、公園緑地 73 (1) 2012. 8
- 154) 被災地のトータルランドスケープの復興、日本道路建設業協会、道路建設 (734) 2012. 9
- 155) 素晴らしき日比谷公園、ライフスタイルダイバーシティの舞台、幕の内弁当のような日本人好みの洋風公園、東京都公園協会、緑と水のひろば (69) 2012. 9
- 156) ガーデンシティ江戸の伝統は公園文化都市 TOKYO の母胎である ランドスケープ・デザイン (86) 2012. 10
- 157) 21 世紀東日本の自然的環境は Bio-diversity で、社会的環境は Lifestyle diversity で、文化的環境は Landscape diversity で持続可能性を高めよう！、日本学術会議、学術の動向 17 (11) 2012. 11
- 158) 庭園の見方考え方、日本庭園の魅力、国際香りと文化の会、VENUS (24) 2012. 12
- 159) 「斑」の風景、Mosaic Landscapes、直視すると生命を、遠望すると生物多様性を、生き物文化誌学会、BIOSTORY18 2012. 12
- 160) 世界に誇る信州・ふるさとと風景づくり (長野県農村景観育成方針策定に向けての提言)、長野県景観審議会 (会長および小委員長として) 2013. 1